古典紹介・解説

九成宮醴泉銘①

佐々木香流

今月号より九成宮醴泉銘となります。

欧陽詢（五五七‐六四一）七十六歳の書です。欧陽詢は虞世南と同じ時代に活躍し、褚遂良と共に「初唐三大家」の一人です。

九成宮とは唐皇室の離宮のことで、太宗皇帝が避暑に訪れた際、庭の一隅に甘泉が湧き出たことを記念して書かれたものです。造形的には、たて長、胴を引きしめそりぎみ（背勢）、楷書の美しさを完成し、その頂点を極めました。これから半年間、整った書風を学んでいきましょう。

蘭亭序①

高橋　素香

東晋の永和九年三月三日。

会稽（かいけい）郡山陰県（今の浙江（せっこう）省・紹興（しょうこう）市）の蘭亭に名士などを招き、禊ぎの行事を行い、そのときに書いた序文が「蘭亭序」です。

字の脇に書き入れたり、上から改める、また塗り消すなどいろいろしていますが、実は草稿なのです。

したがって私達の習う蘭亭はいずれも、搨（とう）本または臨本の系統ということになります。

行書の傑作、王羲之の名品「蘭亭序」をこれから半年間学んでいきましょう。